

震災資料の活用事例

震災資料展示についての取り組み

筑波 匡介

目的

平成 16 年 10 月 23 日に発生した「平成 16 年（2004）新潟県中越地震（以下「中越地震」）から、7 年が過ぎた。その間に新潟県中越地震復興基金（以下「基金」）が立ち上げられ、復興へ向けた様々な取り組みが行われてきた。

本稿では筆者らが取り組んだ震災アーカイブ（震災に関する資料）の活用についての一事例について、その手法等を記録に残し、本取り組みの反省や現代資料の活用などに意見をいただくための材料としてまとめることを目的とする。

経緯

基金で取り組んだ事業として「震災の記憶」保全・収集事業がある。この目的としては『「震災の記憶」（中越大震災の資料・被災現場・記録）は、国土の 70% を占める中山間地域における大規模災害の経験・教訓として、全国共有の財産である。広大な被災地エリアに点在し、または埋もれているであろう多くの貴重な「震災の記憶」について、防災安全に関する教育・研究、情報発信、技術振興など多角的な見地から調査し、収集・保全する活動を支援することにより、「震災の記憶」の継承に資する。また、これらの活用検討を支援することにより、復旧・復興に多大な支援をいただいた全国への教訓・知見の還元、地域資源として活用した被災地の復興に資する。』としている。

私が所属する社団法人中越防災安全推進機構（以下「機構」）では、この事業を活用して長岡市千歳地区応急仮設住宅及び応急仮設集会場の保存などを行うなど、現地保存の検討を開始して、また、長岡市立中央図書館文書資料室（以下「文書資料室」）や、小千谷市立図書館と震災に関する資料収集を協働して行い、その資料の活用として企画展などを被災地各地で開催した。また新潟県立歴史博物館との協働では、企画展「山古志ふたたび」展など震災に関する資料保全、資料収集、活用に取り組んでいる。

これら事業にて収集した資料や、震災に関係する資料を総称して「震災アーカイブ」としている。この活動を通して、今年オープンした「中越メモリアル回廊」事業が成立している。

中越メモリアル回廊拠点整備事業について

平成 23 年 10 月に「中越メモリアル回廊」（以下「回廊」）が開設された。これは平成 17 年 8 月に出された「新潟県復興計画」の中で中越震災メモリアルと総合的研究機関の項目に取り組ま

られ、①震災メモリアル拠点構想②震災アーカイブス・ミュージアムの整備の構想にもあげられ、被災市町村でも取り組んできた。

被災市町村では、平成 19 年 3 月に策定された長岡市、小千谷市、川口町（当時）による「災害メモリアル拠点整備基本構想」を策定している。

目的として、「①中越地域の経験を保存・継承した、防災活動の拠点づくり。②地震・災害・復興・防災の研究・学習の拠点づくり③中越地震をきっかけとした、新たな地域振興に寄与する」ことがあげられている。この制定には「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」や、「雲仙普賢災害記念館」などが参考とされている。

これをより具体化し、実現させるために、平成 22 年「災害メモリアル拠点整備基本構想に関する提言」として「中越メモリアル拠点整備基本構想」を機構にて取りまとめ、2 市 1 町の首長により、新潟県知事へ提出された。

「中越メモリアル拠点整備基本構想」では、「中越大震災メモリアル拠点に期待されている基本的な役割」として①災害に強い地域づくりに向けた拠点②被災経験や被災現場を活用した交流人口拡大の拠点③世界的に多発する災害の被災地への支援や貢献活動の拠点、の三つを掲げ、さらに「中越大震災メモリアル拠点構築の視点」として①「知」のネットワークの形成（学民連携による知見の創出・発信の仕組みづくり）②「地」のネットワークの形成（知見活用による交流人口の拡大の仕組みづくり）の二つを取りあげている。

「中越メモリアル拠点整備」は、被災した現場をなるべく現状のまま保存することで、震災経験の風化を防止することを目的としている。

この事業では 4 施設 3 パークを被災地に設けることで震災の記憶を伝える場として整備し、震災アーカイブの収集・活用拠点としての運営も担っている。

4 つの拠点施設であるが、長岡市大手通に「長岡震災アーカイブセンター」、小千谷市に「おぢや震災ミュージアム」、長岡市川口に「川口きずな館」がまずオープンし、長岡市山古志では「やまこし復興交流館（仮）」が開設の準備を進めている。

3 パークであるが、地震発生の震央である川口武道館に「震災メモリアルパーク」、大規模な土砂崩落により被災現場となった長岡市妙見に、「妙見メモリアルパーク」を整備した。山古志木籠では、中越地震最大の土砂崩落により発生した河道閉塞による水没集落があり、「木籠メモリアルパーク」として位置づけている。

資料収集と活用について

中越地震から 4 年目の平成 20 年には、文書資料室と小千谷市立図書館、長岡市山古志支所、長岡市川口支所と協働した企画展を開催した。収集している資料を公開することで、さらなる収集と、資料の活用を検討する目的があり、試験的な意味合いもあった。また各地に点在する現地保存のメモリアル拠点を見ていただく意図もあり、チラシと共に地図を作成して市内各所で配布した。地図にはスタンプラリーを実施して来訪者が各施設を巡回していただけるか試行的に取り組んだ。

5 年目の平成 21 年には、長岡市、小千谷市、長岡市山古志地域、長岡市栃尾地域、十日町市にて連携企画展を開催した。この取り組みでは、拠点が被災地に点在することもあり、回廊の前段として、長岡市、小千谷市、長岡市川口地域、長岡市山古志地域、十日町市などでスタンプラリーを引きつづき行った。6 年目には、長岡市小国地域で地震発生後に救出した古文書資料の展示を同地で開催を行い、資料の現地活用として取り組んだ。

これらの連携企画展では、実際に資料の活用を学び、回廊の

オープンに向けた広報活動を併せておこなった。山古志では、財団法人山の暮らし再生機構山古志サテライト地域復興支援員が中心となって、山古志にて収集した震災アーカイブの展示を行っていただいた。山古志ナンバープレートのスクーターなどは関係機関との調整が必要であったが理解と協力を得て、展示することが可能となるなど、小さいことではあるが、収集、活用、保存について経験を積むことが出来た。

これらの経験を経て、おぢや震災ミュージアム「そなえ館」にて作成した「被災マンションの展示」を震災アーカイブの展示の一事例としてまとめておきたい。

おぢや震災ミュージアム「そなえ館」について

平成23年10月にオープンした、回廊の拠点として位置づけられている「おぢや震災ミュージアム そなえ館」（以下「そなえ館」）は、災害疑似体験・防災学習拠点として位置づけ整備を進めてきた。

そなえ館は小千谷市上ノ山にある専門学校（信濃川テクノアカデミー）の校舎を再利用し市民学習センター集館として運営されていたが、その2階を増床して、設置する案で検討が進められた。

そなえ館では、地震発生から3時間、3日、3ヶ月、3年の時間の経過を展示の基本とした。そなえ館では、地震についての備えを教えるのではなく、展示を見ることでどのような備えが必要かを来館者自らが考えることができるような展示設計を行っている。

事業開始にあたっては、小千谷地区拠点整備委員会（委員長丸山久一長岡技術科学大学教授）を設置し、また市民との意見交換会をととして内容、運営方針などを検討していった。より具体的な内容については、整備委員会のあとをついで展示運営委員会を設けて議論を行った。この委員会において真実を伝えるためには、実物展示の重要性が再確認され、急速実物展示を検討することとなった。

現実には、地震発生から約6年半とかなりの時間が経過しており、新たな地震被害を伝える実物の収集はほぼ不可能であった。しかし地元新聞である「小千谷新聞」に、中越地震の被害を受けて、そのまま残されているマンションの解体に関する記事が、平成23年3月に掲載された。マンションは解体工事が直近で開始されることが決定しており、準備期間もなく、緊急的にマンションに残された家具等を震災アーカイブとして収集することとなった。

室内は長い年月放置されていたこともあり、割れた窓などから鳩の侵入があり、辺り一面がそのフンにより汚され、地震のために散らかった家財道具等により、まさに足の踏み場も無い状況であったが、中越地震発生時刻で止まったままの時計や、平成16年10月付の配布物などが確認され、発生当時の様子に近い状態で残されていた。

資料の収集について

収集にあたり以下のような方針とした。

- 被害の状況が特にひどく、事後あまり手が加えられていないと判断できる台所まわりのみを対象とする。
- 展示に際して再現が極力可能のように収集・保管すること。また出納ができるように収集すること。
- 食品等腐る恐れのある物があっても、可能な限り保存しておくこと。
- 鳩の糞が付着しているが、地震発生後の経緯でもあるため現段階ではそのままとする。
- カビ、害虫の発生の恐れがあるためビニール袋に入れて密封し防虫・防カビ剤を入れて対応する。



解体されることになったマンション



室内の様子



床に散乱した家財を、グリッドを設定し把握する

a. として、解体工事まで時間が限られており、また東北で発生した東日本大震災の対応も重なり、残された時間で作業が可能と判断した台所まわりのみを収集の対象とした。また、キッチン、釣り棚など作りつけの流し台については、鳩のフンによる汚れが極めてひどいため、別室から同型式のものを取り外し収集することとした。

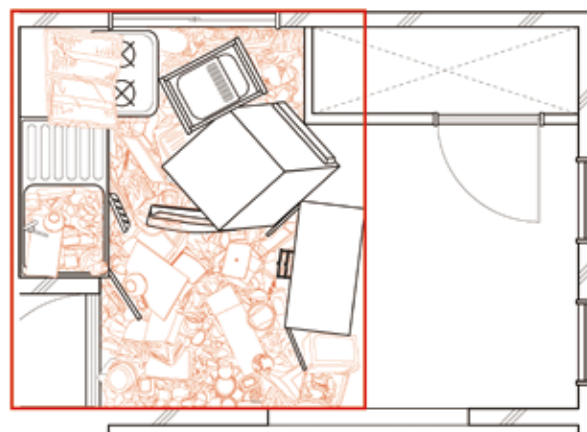
b. については部屋の床に15cm四方のマス目を設定して、番付をして、それらのひとつひとつを直上から写真撮影し記録した。また部屋の現状平面図を作成し、大型の家具、家電等の位置を確認した。冷蔵庫の傾き等なども下げ降りを使い角度を記録した。また床に散乱した家財道具、食器の破片などは、マス目毎につけた番付でわけて、箱に詰めることとした。

c. 台所では、食品などかなりの数を確認した。この時点では地震発生を再現するのか、また7年の歳月が経過したことも含めた展示とするのか展示の方針が決定していないこともあり、それら食品もできる限り収集することとした。

d. 鳩のフンも同様であり、食品や家具に付着したフンを取り除いている時間的余裕もなかったためにそのまま収集することとした。

e. このように、腐る恐れのある物や、フンから害虫が発生することも十分に考えられたために、ダンボール箱に直接入れるのではなく、ビニール袋にいったん入れて防虫・防カビ剤を封入してその発生を防ぐこととした。これらは結果的に64箱にまとめることができ、小千谷市と相談して小千谷市若柵にある旧若柵小学校へ保管することとした。旧若柵小学校は廃校となっており、現在は古民具の保管倉庫として使用されている。

保管にあたり、腐敗や害虫の発生等が懸念されたために、慎重に対策を講じる必要があり今回の対応とした。燻蒸なども検討したが、密閉された場所での燻蒸の必要があり、また展示場所が密閉空間を想定していなかったために今回は見送った。



散乱した家財をスケッチで記録



小分けした資料は64箱となった



洗浄前の資料 フンがこびりつき、カビが発生している

展示に向けての準備

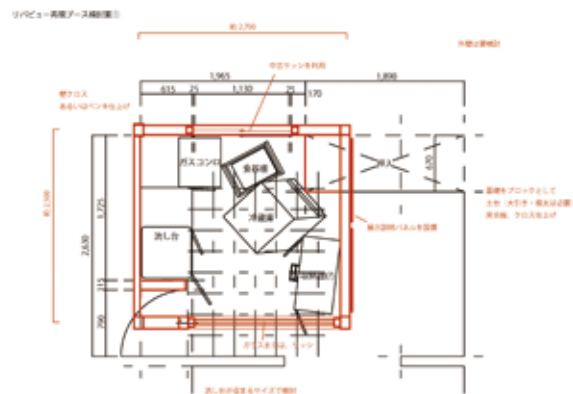
そなえ館オープンにあたって、展示を主に写真パネルとPDAによる音声案内として進める事で決定していたが、館内での展示には空間に限りがあり、屋外に設置することとした。

そなえ館は、増床した部分の1階を屋外展示活動に利用できるようにピロティーとして整備しており、ここを利用して新たに展示ブースを設置することとし、設計を始めた。今回の展示については、オープンまでの時間と予算に限りがあり、そなえ館の展示業者ではなく機構の直営として、取り組むこととした。展示ブースの設計、制作にあたっては、展示の方針を以下のように考えて実施した。

- f. 地震発生直後を現状から想定して再現する。なお、大型家電や、流し台などを中心とした範囲で室内を再現する。
- g. 展示に際し腐敗等の恐れのある資料は撤去する。
- h. 可能な限り、収集時の状況へ復し再現する。
- i. 今後の展示移動など考えて、収集した資料は接着しない。
- j. 地震に際しての備えが行われていなかった室内として、展示し、案内をする。
- k. 数年間の展示に耐えられるようにする。
- l. 集合住宅の再建に関しての問題点も説明する。
- j. 部屋の地震前の様子を想定したCGを作成し、そなえ館に設置する地震動シュミレーターに利用する。

f. は、資料収集時を、地震発生後から、家具や家電がそのままであったと仮定することとした。部屋の再現については、収集した家財や家電製品で再現できる範囲で設定を行うこととした。

資料を収集した状況に復することで、地震発生の状況の再現とする事とした。



再現する範囲は、赤枠の中として再現を試みた

g. は、食品等で腐敗した物、またその恐れのある物については、デジタルカメラで撮影したのち、名称等を記載して記録に残し廃棄した。洗浄作業は、資料自体を傷めないようにファインクロス等で乾拭きすることとしてフンなど汚れを落とすことにした。汚れのひどいものについては、展示後のカビの発生を抑えたいために水での洗浄は極力避けて、エタノールによる拭き取り作業を行った。どうしてもこびりついて落ちない汚れや、ガラス瓶の中に付着したものを取り除く際には水道水を利用し、十分に天日干しを行った。また乾燥させた後にエタノールを噴霧した。ものによっては、エタノールによって脱色してしまうものもあり、注意が必要であった。

洗浄作業においては、小千谷市在住の主婦たちにお申し作業に協力をいただいた。台所関係の資料が多かったために、この作業は任せて効率は非常に良かったと考えている。

h. 収集時に撮影した写真や図面を参考として、できる限り収集時に復するように努力した。このことで真実性、真正性を維持するようにした。

i. 一度設置した資料は動かないように接着した方が良いのではとの意見が当初あったが、施設としての展示替えなど現時点でまだ確定していない事項があるために今回は接着することをしなかった。

j. 何を伝えるのが重要な課題であるために、地震に備えないと、この展示のように危険であると感じてもらえるように説明の準備も始めた。

k. ブースは耐水、対雪も意識してピロティー外でも独立して耐えうる物とした。設置場所である当初ピロティー部分には仮設住宅を展示する予定であったが、東日本大震災による供給不足にて、仮設住宅の展示は延期となった。代替え案としてもこの展示が採用されることとなった。仮設住宅の展示がおこなわれた際には、独立して展示できるように片流れ式の屋根として、冬期間の降雪にも耐えられるよう設計した。その点自重が重くなり移動が難しいものとなった。

l. 阪神・淡路大震災では、集合住宅の再建も大きな問題として取りあげられたが、中越地震でも多くはないが、一時例としてこの問題を取りあげることとした。これは展示パネルでの説明とすることにした。

反省点

実際のマンションで使われていた壁紙や、床材はすでに廃盤となっており手に入れることはできなかったのも、模様の雰囲気似たものを再現では使用した。

また部屋を区切って再現したために、あるはずのない壁にまで壁紙を貼ってしまった。これは、マンションにもここに壁があったかと誤解を生む可能性が高く失敗であった。

捨ててしまったものを記録に残すことは行ったが、それらを復元することは今回実施していない。重層的に床に散乱していた資料の中には、それらを捨てることで被災現場の復元とは言えないので、再現という言葉を用いている。この点についての説明等が必要である。

今回の展示においては、短期間での工事完了が常に目標となってしまう、十分に検討を行う余裕がもてなかったことは反省しなければいけない。また組織としての方針があいまいなままに取り組んだために、不完全であると認識している。

できる限りの最善策で臨んだつもりであるが、改善策や、既存の展示などで参考となるものがあれば、ぜひともご教示をお願いしたい。



展示用に作成された震災前を想定したCG



外壁は防水塗装を施し、片流れの屋根とした



室内を再現した様子

謝辞

新潟大学復興科学研究所福留邦洋特任准教授から、調査の進め方についてご教示いただきました。被災資料の収集にあたって、小千谷復興支援室及び、大嶋奈美地域復興支援員の協力をえて、図面作成、写真撮影など基本的な調査を行うことができました。ブース設置に関して、トナリ木工所三井健氏へ協力をお願いしました。資料保存については、新潟県立歴史博物館田邊幹主任研究員より助言をいただきました。資料収集から、展示作成まで小千谷市役所、小千谷市民の皆様、そなえ館建設業者のみなさまからたくさんのご協力と、励ましをいただきました。文末となりますが記して謝意とします。ありがとうございました。